

ハイデガーとドゥルーズ／ガタリの近さと遠さ

——相依相属性をめぐる——

増田 靖彦 (龍谷大学)

というのも、存在より前に政治があるからだ (MP249)

序

ハイデガーとドゥルーズ／ガタリ¹はどのような思想的関係にあるのか。これを探るのが本稿の目的である。この試みに取り掛かるやいなや、ドゥルーズ／ガタリがハイデガーについてアフォリズムめいた叙述しか残していないという困難な事実を突きつけられる。わずかにドゥルーズがジャリ論でまとまった言及をしているものの、その主旨はハイデガーを論じるというよりも揶揄する性格のほうが勝っている²。したがって本稿は、決して多いとはいえない断片的な叙述を拾い集め、そこに通底するコンテクストを浮き彫りにする作業が中心となるだろう。このいくぶん見通しの悪い作業を通じて、ドゥルーズ／ガタリによるハイデガー読解が、その言及の少なさにもかかわらず、彼らにとって不可避な哲学的プロブレマティックのひとつであったことを明示したい。

1. 問題の所在

意外に看過されている事実がある。それは、ドゥルーズが「哲学すること」を自ら試みた最初の本³ (DRF280) と位置づける『差異と反復』で、ハイデガーを重要な参照項のひとつとして挙げている、という事実だ。実際、同書を繙くと、ハイデガーの哲学がはしがき (Avant-propos) で主題として真っ先に掲げられており、また結論 (Conclusion) で批判

¹ ドゥルーズとガタリとドゥルーズ／ガタリの思想的異同について、とりわけ『アンチ・オイディプス』(1972) 刊行以後のそれについて、研究者の間で統一の見解はないといってよい。大方の同意が得られるのは、ドゥルーズが構造主義およびラカン的な精神分析から決定的に離反したのはガタリによる影響が大きい、ということぐらいだろう。こうした事情に鑑み、本稿では、特に必要な場合を除き、三者を峻別せずにドゥルーズ／ガタリと表記しておく。

² Cf. Gilles Deleuze, "Un précurseur méconnu de Heidegger, Alfred Jarry", in *Critique et clinique*, Paris, Éditions de Minuit, 1993, p. 115-125. (たとえば、ハイデガーが現代ドイツ語のなかで古代ギリシア語と古ドイツ語で行っていることは、すでにジャリがフランス語のなかでラテン語、古フランス語、ブルトン語で行っているとか、ジャリにおける pataphysique の構想がハイデガーの「形而上学の克服」と似た挙措を示しているという指摘、あるいはハイデガーがナチズムを見出すところにジャリはアナキズムを見出すという主張などが挙げられよう。)

的に検討されているのを目の当たりにすることができる。ドゥルーズによれば、ハイデガーはその差異の概念に基づいて反ヘーゲル主義、すなわち存在 - 神 - 論 (onto-théo-logie) とは別の仕方の思考を探求する点において評価すべきでありながらも (DR1)、そこで展開される反復の力能 (puissance) が同じものの回帰としか捉えられていないかぎりでは糾弾すべきなのである (DR384)。この両義的な見方が成立する論拠はどこにあるのか。まずそれが探られねばならない。

手掛かりとして『差異と反復』第一章の末尾に付された「ハイデガーの差異の哲学についてのノート」を参照することにしよう。ハイデガーへの言及の中でも相対的にヴォリュームをもつこの一節で、ドゥルーズは、もっぱら後期の著作や論文を念頭に置きつつ³、ハイデガーにおける差異の概念を考察している。それによれば、ハイデガーは差異を〈二襲〉 (Pli, Zwiefalt)、つまり「明るみ」 (eclaircie) と「隠蔽」 (voilement) の二重の運動において、存在が存在者を構成する仕方 (DR90) と捉えることで、ひたすら自己差異化する運動 (se-différenciant) を見出した。これは、差異を (総合や媒介や調停によって) 「〈同一的なもの〉」 (l'Identique, das Identische) に従属させるのではなく、その逆に、差異の寄せ集め (rassemblement, Versammlung) によって「〈同じもの〉」 (le Même, das selbe) が成立するという視角をもたらす。ハイデガーは同〔同一的なもの〕の偏差としての差異と、差異の偏差としての同〔同じもの〕を峻別し、後者に差異の本質を見出したのである。このかぎりではドゥルーズはハイデガーへの共鳴を隠そうとしない。

しかし他方で、ドゥルーズは、ハイデガーがこの〈同じもの〉における差異の寄せ集めとしての「合一」 (union, Einigkeit) と〈同一的なもの〉における差異の解消としての「統一」 (unité, Einheit) を区別するだけにとどまり、前者における同と差異の「相依相属性」 (appartenance mutuelle, Zusammengehören) をそれとして厳密に探究していないことに不満を露わにする。というのも、ハイデガーのように差異をそれ自身において考える (penser la différence en elle-même) のであれば、「同じものと同一的なものとの区別が成果を挙げるのは、〈同じもの〉を異なるもの (le différent) に帰着させるような転換を、当の〈同じもの〉がこうむる場合に限られる」 (DR91) はずだからである。差異の思考は、差異の異化作用を徹底させて〈同じもの〉の絶えざる変容 (差異の溢出による同の解体) を促してこそ、その名に値する。にもかかわらず、ハイデガーはその試みを途上で停止させているのではないか。『差異と反復』のタームを援用しつつ約言すれば、ハイデガーは現前性を恒常的な表象 (représentation) でなく本質的な現れ (Wesen) と捉えることで、存在把握にまつわる「思考のイメージ」 (思考に巢食う暗黙の了解) から離脱して「イメージなき思考」 (新しい思考の創始) に足を踏み入れながらも、同に関しては「思考のイメージ」に依然として囚われていたため、差異の力能を見誤っているのである⁴。ハイデガーをこのように

³ 明示されているテキストは『根拠の本質について』第三版序文 (1949)、『形而上学とは何か』第四版後書 (1943)、『講演と論文』所収の「形而上学の超克」 (1936-46)、「詩的に人間は住む」 (1951)、『同一性と差異』 (1957) である。

⁴ 厳密に言えば、ドゥルーズは「思考のイメージ」それ自体を忌避するわけでは必ずしもない。そうではなく、「思考のイメージ」が予断を招くせいで思考や思考の枠組みの凝固／固定化を促しがちであることに警鐘を鳴らすのである。

解釈する理由を、ドゥルーズは「ニーチェの永遠回帰に対する彼〔ハイデガー〕の批判」(DR91. 補足は論者)に求めている。それゆえ、ニーチェ解釈における二人の異同を確認しなければならない。

2. 力の相違、そして永遠回帰における反復

周知のように、ドゥルーズは『差異と反復』に先立つ『ニーチェと哲学』で、ハイデガーの一連のニーチェ講義を参照しつつ自らの解釈を展開している。その詳細については別の機会に検討したことがあるので⁵、ここでは要諦を指摘するだけにとどめておく。

ハイデガーの読解と、独創性においてそれに勝るとも劣らないドゥルーズの読解が齟齬を来すポイントは、いわゆる価値転換のプロセスにみられるニヒリズムの諸段階を、一方向的な進展と捉えるのか(ハイデガー)、それとも多様な要素の交錯による効果と捉えるのか(ドゥルーズ)にある。簡潔に検証しよう。ドゥルーズは一方で、ニーチェの価値転換を「従来の諸価値の古い同じ座に新しい価値が定立されることだけを意味するのではなく、常にそれに先立って、それは座そのものが新しく規定されるということをも意味する」(GA6-2, 253. 強調は原文)と解釈するハイデガーに歩調を合わせる。しかし他方で、ハイデガーがほとんど言及しないディオニュソスに注目し、その働きを価値転換のプロセスに読み込むことで、ニーチェにおける力能(Macht, puissance)と力量(Kraft, force)の質的相違を強調する。そしてそこに両者のせめぎ合いとしての相依相属性を見出してハイデガーと袂を分かつのである。

ニヒリズムの諸段階を直線的展開ではなく、力能の差異と力量の差異それぞれのせめぎ合いと捉えることで、ドゥルーズは、何ものかが実現／現実化される(s'effectuer)ときの二重の移行過程、すなわち力能と力量の差異としての〈可能的なもの(le possible)から実在的なもの(le réel)の発生〉と、力能の内的差異〔力能の意志〕としての〈潜在的なもの(le virtuel)から現働的なもの(l'actuel)の創出〉の峻別を主張する。この二つの相違を大まかに述べると、前者は個体が自らの本質を開花させていく運動をみるのに対し、後者はそのつど異なる様態で個体が表現される傾向をみるところにある。ただし両者は決して排他的でない。なぜなら、潜在的なものと現働的なものは、発生論的には(généalogique)異質であるものの、発生的には(génétique)実在的なものであることに変わりないからであり、また協働して可能的なものを〔再〕構成する働きをもつからである。ドゥルーズはこの発想に則して、何ものかが生起するに当たっては、いくら決定的にみえても、そこには質的にも方向的にも多様な複数の力の緊張関係が働いていると考える。

この更新的なニーチェ読解に基づき、ドゥルーズは永遠回帰に大胆な解釈を施す。すなわち、力能の意志を永遠回帰と同定し、永遠回帰における反復に発生論的解釈を適用する

⁵ 拙論「思考と哲学——ドゥルーズとハイデガーにおける」、小泉義之・鈴木泉・檜垣立哉編『ドゥルーズ／ガタリの現在』所収、平凡社、2008年、513-536頁を参照されたい。

ことによって、「永遠回帰は異なるものについての同じものである」(DR165. 強調は原文)という観点を導出するのである。ドゥルーズによれば、ニーチェにおける「同じものの永遠回帰」とは、同一的なものが回帰することではなく、回帰するという事実が同じであることを示すにすぎない。というのも、もし同一的なものが回帰するのであれば、それを回帰と認めることなどできないからである。回帰が回帰であるためには、それがそのつど回帰であるという差異が生じていなければならない。しかも、前節で述べたように、永遠回帰における反復がそのたびごとに新たな生成である以上、そこで働く力は同じものの異化効果をもたらすはずである。だとすれば、永遠回帰は「異なるものの永遠回帰」であらざるをえない。こうしてドゥルーズの企図は明白となる。それは、差異が差異として機能するためには反復を伴わねばならず、反復が反復として機能するためには差異を伴わねばならない、ということだ。差異と反復は相互を不可欠の発生論拠とするかぎり、各々がそれとして機能するのである (DR143)。

この論点をハイデガーにあてはめるとどうなるだろうか。おそらく、ハイデガーの探究は、同一的なものと同じものを峻別することで「差異」については慧眼を示したが、「反復」の彫琢を怠ったため、二つの概念の連動を十分に考察するに至っておらず、その意味で問題含みである、という評価になると思われる⁶。このように、ニーチェ解釈の異同は、存在論をめぐるドゥルーズとハイデガーの思考の分岐を示唆するのである。

3. 思考、そして外という次元

思考すること、ないし思考の発生に関するドゥルーズの議論は、それでもなおハイデガーの探究に寄り添う仕方で端緒を開いている。『差異と反復』の第三章で、ドゥルーズは『思惟とは何の謂いか〔何が思索を命ずるか〕』の冒頭を参照しつつ、そこにみられるハイデガーの問題提起——私たちはいまだ思考していないのだから、思考することを学ばなければならない——を共有する。ただし、私たち〔人間〕に「思考せしめる」(*donne à penser, zu denken gibt*)ものを贈与 (*don, Gabe*)と捉えるハイデガーに対し、ドゥルーズはそこに暴力 (*violence*)をみてとる。ドゥルーズによれば、ハイデガーが贈与というメタファーに固執するのは「存在に関する前存在論的な暗黙の了解」としての「〈同じもの〉の優位」に根ざした「ひとつの欲望、あるいはひとつの *φιλία*、思考と思考されるべきものとのアナロジー、より適切にはそれらの相同性 (*homologie*) といったテーマ」を保持しているからである (DR188, n.1)。しかもそこには、理性的な生き物としての人間への期待さえ透けて

⁶ この評価は『差異と反復』という著作の構成からも傍証が得られるだろう。というのも、その序論 (Introduction) では、差異よりもむしろ反復のほうの存在論的射程の重要性が示唆されているからであり、また本稿で参照した「ハイデガーの差異の哲学についてのノート」が第一章の差異論の掉尾を飾るとともに、第二章の反復論の嚆矢・導入の役割を果たしているからである。このコンテクストを受け、第三章では「思考のイメージ」から「イメージなき思考」への転回が企図され、第四章と第五章では、可能的なものから実在的なものの発生と、潜在的なものから現働的なものの創出という二重の運動が、*différent/ciation* として展開されることになる。

見えなくもない⁷。

これに対してドゥルーズは、差異と反復が思考に思考することを強いるときの衝撃にはられる暴力性に注目する。そして前節で略述した永遠回帰の解釈に立脚して、この暴力性を動物性 (animalité)、それも愚劣さ (bêtise) とみなす。「というのも、(…) 思考は思考に思考することを強いるものが何もないかぎり愚かな (stupide) ままであるのだから、思考に思考することを強いるものは愚劣さの存在でもあるということに、つまり、思考は思考を強いるものが何もないかぎり思考しないということになるのではないか」(DR353)。しかし、ドゥルーズによれば、これは唾棄すべき事態ではまったくない。それどころか、思考はこの愚劣さによってのみ覚醒されるのだから、思考することに不可避なこの動物性は思考に豊饒さをもたらし、「思考の生殖性」(génitalité de la pensée) というポテンシャルを開放してくれるものですらある。「愚劣さ(誤謬でなく)は、思考の最大の無力能(impuissance)をなしているのだが、思考に思考することを強制するものにおける思考の最高の力(pouvoir)の源泉をもなしている」(ibid.)。ドゥルーズは、思考の覚醒に暴力的なものの介入を見出し、その愚劣さを人間に穿たれる非人間的ないし脱人間的な契機と捉えることで、そうして人間が人間であることを恥辱(honte)とみなすことで、人間が人間的思考から離脱する、あるいは少なくともその限界を突破する積極的なチャンスをもてとろうとするのである。

思考のこうした含意は、ドゥルーズにおいてもハイデガーと同様、存在の問いから切り離せない。それゆえ、思考の覚醒にみられる二人の規定の相違は、思考と存在の関係をめぐる議論にも反映されることになる。先述したように、存在者と存在の相依相属性を二襲と捉えるハイデガーは、この二襲としての存在論的差異が隠蔽されつつ開蔵する(entbergen)さまを開襲(Entfaltung)と呼び、そこに思考の出現をみてとっている(GA7, 245-259)。これに対してドゥルーズは、ハイデガーの襲の思考が「先行的な無差異に」ではなく「絶えず襲を拡げて(se déplier)は折り返す(replier)ひとつの〈差異〉に」向けられていることを評価しながらも(P42)、「ハイデガーはあまりに急ぎ過ぎてしまった。彼はあまりにも性急に折り畳み過ぎたのである」(F121)と批判する。どういうことか。ドゥルーズによれば、ハイデガーは非覆蔵性(ἀλήθεια, Unverborgenheit)としての存在の真理に「闘争の源泉」をみてとらなかったために、存在が折り畳まれる(se plier)地平に作用する「外」(dehors)——外部(extériorité)ではなく⁸——の次元を見過ごしたのである

⁷ もちろん私たちは、ハイデガーが、〈同じもの〉は必ずしも根拠たりえず、そこからさらに進んで「没根拠の深淵」(Ab-grund)に直面する必要があると述べていること(GA79, 111-112)、そして原子力エネルギーよりも思考のほうが暴力的であると述べていること(GA79, 89)を知っている。しかしながら、ハイデガーは同じものの反復(das Wiederholen des Selben)を原初的なものへ近づくための思考の技(die Kunst des Denkens)とみなすどころかノスタルジックな発想を放棄しないし(GA79, 136)、思考せしめるものを思考すること(Denken)に贈与への感謝(Dank)という平穏な合一的光景をみてとっている(GA8, 146)。これとは逆に、同じものの反復を異なるものの回帰と捉えるドゥルーズは、後に詳述するように、同じものの反復を、そのつど一回限りの特異性をもたらす運動とみなす。それゆえ、同じものの反復は原初的なものへ近づくどころか、むしろそこから遠ざかる異他化を促すための思考の技ということになるだろう。

⁸ 外と外部の違いは、前者が存在論的次元で諸力(forces)の生成に関わるのに対し、後者が存在〔者〕的次元で諸形態(formes)の歴史に関わるところにある(F92-93)。なお、『差異と反復』では、差

(F120)。外とは、思考の発生に寄与する暴力としての思考しえないもの (l'impensable) の謂いであり、思考とその次元を異にするものの、思考を新たに駆動させる働き〔ならざる働き〕を指す。したがって、それは存在でもなければ、二巽としての存在論的差異でもない。ドゥルーズはこの外を、折り畳まれることで思考の中心に穿たれ、新しい内 (dedans) を構成する作用と言い (F104)、そうした力能であるかぎりの生であると述べる (F102)。この生が理性的な人間の生ではなく、愚劣さとしての動物性であることはもはや言を俟たないだろう。そして、それがディオニュソス的な生を彷彿させるかぎり、ここにもニーチェの影がちらついているのを垣間見ることができる。

巽が折り開かれ (s'expliquer)、あるいは折り込まれる (s'impliquer) とき、それ自体は決して形成されることなく、あくまで巽の運動の間隙としてのみ作用する「外」。この外の次元こそ、ハイデガーが垣間見ながらも精察を怠った当のものである。しかも、ドゥルーズによれば、そうして働く「諸力の関係、または権力の無形の関係」である存在の第二の形象 (figure) としての「〔権〕力的存在」(Possess) を顧慮しなかったことが「彼〔ハイデガー〕の技術的で政治的な存在論の奥底に潜む曖昧さ」を引き起こしている (F120-121. 補足は論者)。かくして、巽において働く諸力の関係について、技術や権力という次元も考慮しながら、ドゥルーズは探究を深化させていくことになる。

4. 存在＝力能＝機械

ドゥルーズは存在と存在者の相依相属性を、巽における存在論的——より適切には、発生論的——な諸力の絡み合いとみなし、そこに働く外の力を注視する。その射程が最も集中的に探究されるのは、〈資本主義と分裂症〉と題されたガタリとの2冊の共著、なかでも『千のプラトー』においてである。とりわけ注目したいのは、『アンチ・オイディプス』で導入された存在のシステムとしての「器官なき身体」⁹が分子生物学的な装いをまとった「機械状のもの」(machinisme) という更新的な規定をあてがわれること、そしてその内実が相互に異質な諸要素の可動的配列としての「アジャンスマン」(agencement) という観点から考察されることである。

存在は、ドゥルーズ／ガタリによれば、ひとつの機械である。機械といっても、それは人間によって制作された道具や機構 (mécanisme) のことではない。そうではなく、機械と

異を異化させるものとして働く「暗き先触れ」(DR156) がこの「外」に相当する役割を担っていると考えられる。

⁹ 器官なき身体とは、器官の欠如や無化を志向するのではなく、器官の有機的統合に抵抗する存在概念として、ドゥルーズ／ガタリがアルトーから借用したタームである。彼らはこれを「イメージなき身体」(AO14) と別言し、器官なき身体が『差異と反復』における「イメージなき思考」に呼応する存在概念であることを示唆している。なお、第2節で述べた『差異と反復』における実現／現実化 (effectuation) の二つの系列の絡み合いはもちろん、『ニーチェと哲学』で分析されていた多様なニヒリズムの交錯や、『意味の論理学』および『プルーストとシーニュ』の特に第二版以降で探究されていた諸系列 (séries) の発散と結合にも、ここでの探究の萌芽的形態がみられることを付記しておく。

は無意識——ただし、個別的経験の遡行的な追求を通じて解釈される精神分析的な無意識でなく、それに抗してスキゾ分析 (schizo-analyse) が提唱する、社会的関係の網の目から生産される集合的なものとしての無意識——から構想され、精緻化された概念のことであり、人間だけでなく他の生物から無機物まで含む存在者一般の非有機的な絡み合いを指す。別の角度からみると、ドゥルーズ／ガタリは、あらゆる存在者を複数の構成要素の離合集散によるひとつの効果として、それもいかなる超越／超越論的な裏打ちもなく内在／直接的に構成されるものとして捉えており、そうした存在の働き (力能) を反映するタームとして機械が選択されたのである¹⁰。したがって、機械とは現象でもなければメタファーでもない。そうではなく、それは存在と存在者の相依相属性そのもののリアリティにほかならない。そして、必ずしも明言されていないものの、この機械という観点から相依相属性を繙くことが『千のプラトー』の主要なモチーフのひとつとなっている。いささか図式的な整理に陥る危険を覚悟の上で、その骨格を概観しておこう。

ドゥルーズ／ガタリは、相互に異質な諸要素を配列するアジャンスマンに、水平方向と垂直方向の二つの軸をみてとっている。一方の水平方向の軸には、内容と表現という二つの切片が含まれる。前者は身体の機械状アジャンスマンを形成し、後者が言表作用の集合的アジャンスマンを形成する。そして他方の垂直方向の軸には、再領土化と脱領土化という二つの運動がある。前者はアジャンスマンが形成されてひとつの働きとして機能することを意味し、後者はその働きが解体されることを意味する (このとき、ある機能の喪失がそれ自体として別の機能に変異する場合もあれば、新しいアジャンスマンに移行する場合もあるし、そのいずれでもなく諸要素がひたすら彷徨ないし離散していく場合もある (MP168, 411))。またそのつどのアジャンスマンの形成と解体に当たっては、他のアジャンスマンとの接続や断絶はもちろん、その発生論的傾向性としての系統流 (phylum) と図表 (diagramme) が関与するとともに、そこから逃れる／こぼれ落ちる流露としての逃走線／漏出線も影響を及ぼす。ドゥルーズ／ガタリにおける機械とは、こうした機械的 (mécanique) ならぬ機械状 (machinique) に錯綜する運動の総体なのである。

こうした瞥見から推察されうるのは、ドゥルーズ／ガタリの機械論が先述した諸々のニヒリズムの交錯に由来する力の差異や異なるものの永遠回帰、襞の開閉に窺われるディオニュソス的な生や外の力といったニーチェ読解を通じて展開された議論の昇華形態である、ということだ。そしてこの推察に少しでも正当性があるなら、存在と存在者の相依相属性の観点から考察すべきは、力の差異、なかでも力能の差異の次元に相当する系統流と図表の理論的射程であり、その実現／現実化としての再領土化と脱領土化の運動になるだろう。

¹⁰ この観点からすると、たとえば人間的身体は、諸器官が有機的に結合した個体ではなく、表皮がインターフェースとして有機的なものと無機的なものが交錯を繰り返す諸力の緊張関係にそのつどもたらされる安定性のひとつの様態と規定することができるかもしれない。この規定は、私たちの身体が決して自律的に存続しえない、つまり、自らとは異質な要素の内在と外在が自らの存続に欠かせないという事実を鑑みれば、容易に理解できるだろう。

5. 抽象機械と領土化

前節でみたように、系統流と図表はひとつのアジャンスマンの形成と解体や、諸々のアジャンスマンの接続と断絶にそのつど内在的に作用する。そうした性質ゆえ、両者は特に抽象機械と言われる。抽象機械は実体でもなければ形式でもなく、あくまで抽象的な質料であり機能であって、そのかぎりにおいて領土化のプロセスおよびそれに伴う逃走線／漏出線の描出を誘発する。この抽象機械によって様々に領土化されて現れるのが具象機械である。ただしこれら二つの機械に優劣があるわけではない。なぜなら抽象機械は諸々の具象機械を横断的に貫くが、それら具象機械がなければ抽象機械の横断性は実現／現実化されないからである。両者は、物質とそれを構成する微粒子の運動のように、あるいは、ニーチェ読解のコンテクストに倣って言えば、力能と力量の関係と同じく、区別されながらも分離しえないまま相互に影響を及ぼし合う。

こうした機械の組成において、ドゥルーズ／ガタリは、アジャンスマンがそれ自体としてニュートラルであることに注意を促す。著名なランとスズメバチの事例 (MP17) でその含意を説明すると、ランは一方でスズメバチの性器となることで自らを脱領土化しながらも、他方でスズメバチの生殖装置に再領土化されるのであるし、スズメバチも一方で花粉を運んでランを再領土化しながらも、他方でランの生殖器官の一部となることで自らを脱領土化するのである¹¹。アジャンスマンにおける、自らを差異化していく運動 (自己異他化) である脱領土化と、自らにおいて差異を寄せ集める運動 (自己固有化) である再領土化は、このように絶えず連動して生じる。もっとも、この二重の運動のどちらの傾向が強いかという違いはある。それを決める要因のひとつが二つの外なる力、すなわち質 [強度 = 内包] としての「速度」と、量 [移動 = 外延] としての「運動」の関係 = 比 (rapport) であり、もうひとつが三つの線、すなわちアジャンスマンを解体させる逃走線／漏出線と、アジャンスマンを凝固させる「硬質な、あるいはモル的な切片性の線」およびアジャンスマンの緩やかな連携を維持しようとする「柔軟で分子的な断片化の線」である (MP249-251)。これら複数の要因の相互内在的な絡み合いが、アジャンスマンの形成と解体の方向を、そして形成されるアジャンスマンの性格やアジャンスマンの解体がもたらす効果を規定する。ここで強調しておきたいのは、ドゥルーズ／ガタリがアジャンスマンの凝固に対して、またアジャンスマンを解体しつつその再構成を試みることに對して批判的であるにもかかわらず、アジャンスマンの解体に創造性だけをみるわけでもない、ということだ (PP51)。アジャンスマンの形成と解体には必然的に両義性、さらには多義性が伴う。それは、決して一義的でないからこそ、ニュートラルな出来事なのである¹²。

¹¹ よりシンプルな事例として、ある旅客機がハイジャックに遭ったとき、それによって「乗客」は脱領土化され、「人質」として再領土化される場合も挙げておく (MP103)。このように、アジャンスマンには常に複数の平面 (plan) が重合していて、ある平面では知覚しえない働きが他の平面では知覚される働きとなる。機械にはらまれるこうした平面の多層性とそこに実在する反復の運動を、ドゥルーズ／ガタリは「リトルネロ」と呼んでいる。

¹² 念のために申し添えておくと、ここでいうニュートラルとは、人間の視点からみて多様な評価ができるということの意味するのではない。そうではなく、アジャンスマンの形成と解体が非人間

アジャンスマンの多義性は、速度と運動がその上に作用するかぎりでは異質な諸力の交錯する場である「共立平面 (plan de consistance) が、それを展開する脱領土化の運動や、それを描いて表面に引き上げる逃走線や、それを構成する生成に先立って存在しない」(MP330) こと、つまりそれらすべてが同時的に生起することと無関係ではない。これを領土 (territoire) の観点から言い換えると、領土は脱領土化の動きと不可分であり、脱領土化は再領土化と不可分であるが、だからといって再領土化は領土への回帰を表わすわけではない。再領土化は領土の形成において、脱領土化の内部で働く差異的關係や、逃走線／漏出線の内部で働く多様体を表わすのである (MP635)。これは、たとえ領土が安定しているようにみえても、そこでは諸力の緊張と速度と強度が渦巻いているのであって、それがさしあたり均衡を維持しているに過ぎないことを意味する。

さらに言及しておきたいのが大地 (terre) である。大地は「領土の最も奥深いところにあるあの強度の点、あるいは領土の外に投射される焦点としてのあの強度の点」(MP418) とされる。大地は領土と同じものではない。けれども不変不動の土地というわけでもない。なぜなら、『哲学とは何か』で言われているように、「大地はその場で脱領土化の運動を絶えず行うのであり、この運動によって、あらゆる領土を超出していく。大地は脱領土化し、脱領土化されるのだ。大地そのものが、集団で自分たちの領土を去る者たちの運動、たとえば海底を一系列になって歩き始める海老や、天空の逃走線に乗って飛ぶ蝗や鳴の運動と混じり合っている」(QPh82) からだ。大地もまた、領土と次元を異にすれども、自らを構成するものから切り離されず、そのかぎりでは構成されたものとしてしか現れない¹³。だとすれば、すべてに先立つのは脱領土化の運動なのだろうか。ある意味ではそうかもしれない。しかし、領土から大地へ向かう以上、「脱領土化の運動は、どこか他の場所に開かれている領土から切り離すことができない」(ibid.)。再領土化のプロセスにおいても事情は同様で、それが大地から領土へ向かう以上、大地から切り離すことはできない。アジャンスマンを構成する諸要素が相依相属性の關係にあるというのは、こうした意味においてなのである。

6. 性起の出来事 —— 脱固有化する固有化の働き、自己を所有すること

ハイデガーにおいても、存在と存在者の相依相属性が世界と自然の対決や世界と大地の抗争として、さらには「大地、天空、死すべき者たち、神的なものたちからなる四方界の反照 - 遊戯」(Spiegel-Spiel) (GA79, 74) という角度から考察されている。また、技術的世

的な要素の関与を不可欠としていること、およびそのプロセスが実現／現実化の二重の移行過程を伴うために予見不可能性が常につきまとうことを意味する。アジャンスマンのこうした性格については、後に『襞 —— ライプニッツとバロック』で「共可能性」(compossibilité) という観点から探究が深められることになる。

¹³ ドゥルーズ／ガタリは、〈故郷〉(Natal) や我が家 (chez soi) についても同じく、アジャンスマンによって構成された場と考えている (MP398-402)。また同様の理由から「土着民 (autochtone) と異邦人 (étranger) を区別することもほとんどできない」(QPh105)。

界に関しても、それは自然と本質的に対立するものでないという立場から、その本質を引き受ける態度として「放下した平静さ」(Gelassenheit)と「隠された秘密に対する開性」が指摘され、そこにみられる相依相属性について「私たちがまったく別な仕方世界の中に滞留する可能性を授ける」と示唆されている(GA16, 528)。そこで、こうした相依相属性の要諦をなすとされる「性起の出来事」(Ereignis)について、粗略ながら確認しておきたい。

ハイデガーが思考の覚醒に贈与をみてとることと、そこに存在と存在者の相依相属性を二襲の開閉と捉える視点があることは先述した通りである。晩年の講演『思索の事柄へ』では、存在もまた贈与によって根拠づけられている。「存在をその固有性に関して(eigens)思考することは、開蔵のうちに覆蔵されて遊戯している贈与するということ、すなわち、〈それ〉は与えるということのために、存在者の根拠としての存在を放擲することを要求する。存在は、この〈それ〉は与えることとしての贈与として、与えることのうちに属している」(GA14, 10)。さらに、ハイデガーは時間も贈与と規定した上で、現前性との関係において、存在の運動としての「本質的な現れとは、滞留することである」(GA14, 16)と述べる。そして「両者を、つまり時間と存在を、それらの固有的なものへ、すなわちそれらの相依相属性へ規定しているものを、私たちは性起の出来事と名づける。(…)/ (…)

それゆえ、「〈それ〉は存在を与える」、「〈それ〉は時間を与える」において与える〈それ〉は、それ自身を性起の出来事として証明する」(GA14, 24. 強調は原文)と言うのである。したがって、そこにおいて存在〔と時間〕が贈与され、存在の滞留において存在者が現れる〈それ〉が性起の出来事ということになる。

ところで、こうした存在の真理ならぬ元存在(Seyn)の真理の議論につきまとうのが、固有化、所有化といったタームである。性起の出来事には「ある種の固有化(ein Zueignen)、ある種の所有化(ein Übereignen)が示される」(ibid.)。ハイデガーは〈それ〉による本質的な現れの滞留——相依相属性の場と捉えてよいだろう——のうちに自らであることの所有を、そしてそこに固有的なものをみてとっている。だが事態はそれほど単純ではない。というのも「それ〔性起すること〕はその最も固有的なものを際限のない開蔵することから引き離す。(…)性起そのものとしての出来事には、脱性起(Enteignis)が属している」(GA14, 28. 補足は論者)からである。性起の出来事はそれ自体として現前せず、そこにおける固有化の働きも脱固有化と切り離せない。だとすれば、〈それ〉はドゥルーズの言う外の次元に相当するのだろうか。しかし、性起と脱性起〔という二襲の運動〕は、滞留という仕方差異を寄せ集め、〈それ〉において合一する〔折り畳まれて一襲になる〕のだから、そのプロセスは思考の覚醒の場合と変わらないように思われる。いや、それどころか、そうした〈それ〉の働きに対して、根拠も曖昧なままに、脱固有化において自己の所有(Eigentum)としての特有性(Eigentümliches)を人間にもたらずという価値付与がなされることは、問題含みの手続きとさえみなしうる。もしその根拠が語源的なつながりに求められるのだとしたら、言葉や言語(が属するのではなく)に介入する言葉外のもの

や非言語的なもの——まさしく外の次元である！¹⁴——の働きが意図的に排除されているか、そうでなければ、それが何らかの超越的な次元として措定されかねない。

これとよく似た危うさは「現実性に潜む、隠された根本動向」(GA79, 62)を探る技術論にもみられる。そこでは、現代技術 (die moderne Technik) の本質としてのゲシュテル (Ge-stell) に対して、ピュシス (φύσις) としてのポイエーシス (ποίησις) に基づく単一性 (Einfalt) が突きつけられ、両者の技術のあり方が物の現前的にあり続ける働き (das Anwesende) に反映される仕方の違いにおいて比較検証された上で¹⁵、自然を挑発する技術 [テクネー] ではなく、自然と共存する技術 [ポイエーシス] が展望されている。しかし、そうした技術への問いは最終的に元存在の真理における開蔵と覆蔵 (Verbergung) の自己固有化の問題へ回収されるし (GA7, 34)、また相依相属性についても、人間 [存在者] は技術の本質に干渉することができないまま、その開示に協力し、そうして存在の語りかけに聴従することで自由になるとされる (GA7, 26-27)。存在者は存在との相依相属性において常に劣位に置かれているようにみえるのである。

ここに窺われる一方向的な価値づけ——哲学以前的な暗黙の了解としての思考のイメージと言ってよい——は、ハイデガーにおける自然と技術の関係そのものにも敷衍できるだろう。というのも、技術と自然が対立的でなく、性起の出来事において根底的に結びついているのであれば、ポイエーシスに属するものとしてのテクネーとポイエーシスは自然との関係において程度上の差異にあるとみなすこともできなくはないはずなのに、そこに本性上の差異だけが見出されるからである。この決定には何か恣意的なものがひそんでいないか。ハイデガーは自然と技術の関係性を捉え直しながらも、それに伴う概念論的な探究を徹底的に遂行せず、途中で停止させているように見えなくもない。もしそうだとすれば、そこには何らかの予断が忍び込んでいるのではないか。

7. 出来事の特異性

——アジャンスマンの変換による力関係の異化、脱所有の戦略

ハイデガーは存在と存在者の相依相属性を、人間 [存在者] による存在への固有的なものの譲渡 (Vereignen) と存在による人間存在への固有的なものの委譲 (Zueignen) からなる往還運動として語っている (GA79, 125)。一見すると、これは存在者と存在の身分規定に優劣を置いていないようにみえる。だが、その内実はというと、前節で確認したように、

¹⁴ もっぱらこうした観点から、『アンチ・オイディプス』やガタリの単著では、ハイデガーの「存在」や「根拠」がラカンの「大文字の他者」と同一視され、そこに否定神学の残滓がみてとられている (QE254-255)。なお、言語については、ハイデガーが「ギリシア語をギリシア的な意味で思考すること、古代の言葉に後世の今日的な観念を混入して解釈するのを避けること」に固執するのに対し、ドゥルーズは「言語をそれ自身で吃らせること」、「自分自身の言語の中で外国人のように話すこと」を指向するコントラストも興味深い (D10-11)。

¹⁵ ゲシュテルに帰属する、同一的なもの (das Selbe) の表象として立てる働き (Vorstellen) の所産たる Bestand と、単一性に帰属する、同じもの (das Gleiche) のおのずと出てくるもの (Hervorkommen) の所産たる Herstand を指す (GA79, 39-40)。

存在から人間への働きかけにおいて——しかもそれは、人間 (Mensch) に向けてではなく、人間存在 (Menschenwesen) に向けてである——人間が存在を思考する体制を整えることになっている。つまり、相依相属性といっても、そこでは存在それ自身が問い直されないまま、人間だけが固有的なものにおいて変容を強いられるのである。

しかし、ハイデガーが言うように、存在は思考する人間を必要とするのであれば、思考によって人間の存在仕方が変容するとき、存在もまた変貌を遂げるとは考えられないだろうか。あるいは、逆から言うと、人間が思考しないで存在忘却に陥っているとき、ハイデガーの主張する存在とは異なる存在〔に相当する何らかの働き〕が存在者とのあいだで何らかの相依相属性において合一されている可能性はないのだろうか¹⁶。問題は〈それ〉による存在の本質的な現れを固有的なもの、自己であることの所有に結びつくことと捉え、そうした状態が本来的であると規定し、そこに優位的な評価を与えるハイデガーのいささか性急な態度である。この態度が彼の入念な思考を無造作に止めてしまい、先へ進ませなかった要因であるように思われる。

ドゥルーズの出来事論 (théorie de l'événement) はそうした隘路をくぐり抜ける試みと云う。ドゥルーズは、おそらくハイデガーの性起の出来事を念頭に置いた上で¹⁷、出来事を特異性 (singularité) とみなす。ただし「特異性は本質的に前 - 個体的であって、人格的ではなく、非 - 概念的である。特異性は個人と集団、人称と非人称、特殊と一般に対して——そしてそれら両項の対立に対して、まったく無差別である。特異性はニュートラルである」(LS67. 強調は原文)。このように明言することで、ドゥルーズは出来事に染みつけた固有的なものを想起させる色合いを脱色しつつ、そこにそのつどの一回性を刻印する。この存在の外 (extra-être) としての「もはや無限な〈存在〉の固定的な個性 (神の有名な不動性) の中でも、有限な主観の定住的境界 (有名な認識限界) の中でも幽閉されることがない諸々のノマダ的特異性」は、また「未分化な深淵ではまったくなく、だが特異性から特異性へと跳躍し、(…) 骰子の一振りごとに常に断片化され、変更される」かぎり「意味を生産するディオニュソスの機械」と言われる (LS130)。

こうした特異的な出来事を生み出すものである機械についても、ドゥルーズ／ガタリはあくまでニュートラルなもの、すなわち、そのつど異質な諸要素を混交させるかぎりで優劣のつけられない働きとみなして追究していく。その構想は技術を、現代の技術的世界の驚異的な発展において失われた——というよりも、その発展とともに新たに創出されたひとつの——自然との合一に回帰させることなど意図していない。そうではなく、むしろ自然も含む機械において、徹底的に機械とともに歩みながら、機械が生産する特異性に関与

¹⁶ このような問いかけは、存在〔すること〕と存在者を混同しているという批判をしばしば受ける。しかし、存在は果たしてハイデガーの主張するように一意的なのだろうか。存在もひとつの運動である以上、存在者と次元を異にするとはいえ、やはり存在の外とともに自らを構成し／構成されるほかないのであり、そのかぎりでも多義性を潜在させているのではないだろうか。問われるべきはこのことであり、ドゥルーズ／ガタリによるアジャンスマン、さらに注 12 で言及した共可能性は、この問いへのひとつの応答とみなしうる。

¹⁷ ハイデガーの Ereignis とドゥルーズの événement の異同の詳細については、米虫正巳「出来事と存在 ——ドゥルーズとハイデガー」(『アルケー』第 23 号所収、関西哲学会、2015 年、55-67 頁) を参照されたい。

するひとつのアジャンスマンを、別のアジャンスマンの形成や別のアジャンスマンとの接続に向かわせること、それによってそこに働く力関係を異化させることをめざす(IM200)。このとき重要なのは、諸要素の本来的な力関係を想定した上で、それに則してアジャンスマンを整えることではなく、アジャンスマンを絶えず変換させて諸要素の布置を改め、新しい力関係を創出し続けることだ。ドゥルーズ／ガタリは、力関係にアジャンスマンを従属させるのではなく、その逆に、アジャンスマンに力関係を従属させようとする。そのねらいは様々だが、本稿のコンテクストとの関連で言えば、力関係の固定化による所有の留取を突き崩すこと、そして力関係それ自体を、論理以前の働きではなく、論理とは異なる論理——*se constituant* としての機械——と捉え、その効果を多様な生産関係として展開することが挙げられよう¹⁸。

この観点からすれば、ハイデガーの性起の出来事における差異の寄せ集めを通じた合一〔〈それ〉の働き〕は、不可能ではないにせよ、諸々のアジャンスマンの効果のうちのひとつでしかないことになる。いやむしろ、差異は離散を余儀なくされているからこそ差異なのであって、離散の可能性なしにいかなる寄せ集めもない。また、開性 (Offenheit) についても、それは放下した平静さとの連動において合一を前提とするのではなく、その逆に、合一を内破させたり、合一に穿たれたりする諸々の裂け目なのであって、その可能性のひとつとしてくだんの平静さとの連動も想定されることになる。

要するに、ドゥルーズ／ガタリは、性起の出来事のうちからひとつの働きだけを取り出して特権視し、それ以外の働きというポテンシャルをみようとしないハイデガーに異議を唱えるわけである。本稿の締め括りとして、その事例をいくつか挙げておこう。

脱領土化されたギリシア人は、自身の言語とその言語学的な富の上で、存在するという動詞の上で、みずからを再領土化する。(…)しかし、ハイデガーにおいては、ギリシア人たちよりも先に進むことは問いにならない。(…)ハイデガーは、そうした脱領土化の運動にあれほど力強く接近しながらも、その運動を裏切っている。なぜなら彼は、存在と存在者のあいだで、ギリシア人たちなら〈存在〉と命名したであろう西洋の〈大地〉とギリシアの領土のあいだで、その運動をこれが最後とばかりに凝固させているからである。(QPh91. 強調は論者)

¹⁸ たとえば、ひとつのアジャンスマンの配列においてはもちろん、同一のアジャンスマンであっても、他のアジャンスマンとの接続の有無やその仕方に応じて、効果は異なる。その違いは、アジャンスマンとその諸要素のあいだにいかなる優劣も序列もないこと、そのかぎりではひとつのアジャンスマンが別のアジャンスマンの構成要素になったり、あるいは、それら諸要素が新しいアジャンスマンを生み出したりすることがあるだけに、いっそう複雑である (LF289-290)。

ところで、ドゥルーズ／ガタリはハイデガーにみられる固有的なものに批判的であるにもかかわらず、アジャンスマン、ニュートラル、機械等々にそれと同じ特性を付与しているのではないか、という反批判があるかもしれない。この反批判は正当である。しかし、だからこそ彼らは、相依相属性における固有的なものが単一的な力関係に収束しないように、そこから逃れて別の力関係を構成できるように、当の固有的なものが絶えずリセットされる余地を見出そうとするわけである。なお、この余地に関しても、「蔵すること」(Bergung)の複数性というかたちでハイデガーにおいてすでに担保されているという指摘があるかもしれない。この指摘についても、ドゥルーズ／ガタリはおそらく否定しないだろう。けれども、それが統合可能性という観点から「自己性の本来的な露呈」として遂行され、そこにのみ相依相属性が追求されることに対しては決して同意しないだろう。

ギリシア人が小アジア内陸部やペルシアや地中海沿岸の人たちとの接触においてギリシア人であったのは紛れもない事実である。にもかかわらず、ハイデガーはギリシア人を隔離し、大地と領土を作為的に囲い込んでしまっている。

この点に関しては、別の角度から次のようにも言われている。

彼〔ハイデガー〕は、ドイツ人の歴史の最悪の時期に、ドイツ人を經由してギリシア人たちに復帰すること (rejoindre) を欲したのである。ギリシア人を待っていたのにドイツ人が目の前にいる、ということ以上に悪いことがほかにあるだろうか、とニーチェは言っていたではないか。

(…) ハイデガーは再領土化の諸々の道の中で迷ったのである。(…) 彼は民衆、大地、血を間違えたのである。というのも、芸術や哲学が呼び求めるような人種は、純粹だと自称する人種ではなく、虐げられ、私生の、劣った、アナキーな、ノマド的な、どうしようもなくマイナーな人種だからである(…)。(QPh104. 補足は論者)

純粹なもの、原初的なもの、単一性を志向することは、必然的にそうでないもの、たとえば、雑種的なもの、中間的なもの、複数性を喚起させるばかりか、そうしたものによってのみ駆動させられうるフィクティヴな試みでしかありえない。このことは、これまでもそうであったし、いまもそうであるし、これからもそうであるだろう。

さらにもうひとつ、やはり同じ視点に立った、おそらくハイデガーのヘルダーリン解釈を意識したと思われる発言も引用しておく。

ヘルダーリンがあれほど深く表現したのは次のようなこと、すなわち、ギリシア人たちにとっての「生国」(natal)は私たちにとって「異国」(étranger)であり、私たちが獲得しなければならないものであるが、それに対して、私たちにとっての「生国」は逆にギリシア人たちが彼らの「異国」として獲得しなければならなかったものである、ということだ。(…) 私たちはギリシア人たちにおいて自らを再領土化するのだが、ただし、彼らももっていなかったものに応じて、彼らがまだそうでなかったものに応じてそうなるのであり、したがって私たちは、私たち自身の上で彼らを再領土化するのである。(QPh97-98. 強調は論者)

ハイデガーはたしかに領土化のプロセスを思考している。しかし、先にみたように、それは相対的な次元にとどまっている。だから、ヘルダーリンのように、それを絶対的な次元にまで徹底させなければならない。そうドゥルーズ／ガタリは言いたいのではないか。

結

ドゥルーズ／ガタリはハイデガーを批判するだけではない。これまでの考察からも明らかのように、彼らはハイデガーにおける存在と存在者の相依相属性という発想、そしてそれを導出した「〈差異〉の哲学」を高く評価している。しかし、ハイデガーは差異を差異

たらしめる反復の精査をなおざりにしたために、外の次元を看過して相依相属性を一意的に解釈してしまい、性起の出来事を同じものの回帰のヴァリエーションのように捉え、そこに非覆蔵性としての存在の真理をみてとることに終始している。ドゥルーズ／ガタリはこの点に不満を抱く。なぜなら、そこでは存在に対する存在者の態度変更だけが要請され、存在によって存在者が根拠づけられる単一的な力関係しか考慮されていないからである。そしてそれに対して、相依相属性という以上、存在と存在者は、たとえ次元の違いはあれ、どちらも存在論的に構成し合うことに変わりなく、そうであるなら、存在者が変容すれば、存在のほうも何らかの変容を被らざるをえない、と考える。そもそも存在自体、自ら構成するのであり、存在の外との関係において構成されるのである。変容するのは相依相属性そのものなのであって、そこで働く力関係は複数的でしかありえない。

いみじくもハイデガーがニーチェの価値転換に見出した〈座そのものの新たな規定〉も、こうした観点から捉えるべきであっただろう。相依相属性の変容は、異なるものの永遠回帰として、すなわち、繰り返されるものが同じであっても、繰り返すことで異なったものとなるかぎりでのそのつど一回限りとして反復されるのである。ドゥルーズ／ガタリは、更新されたニーチェ解釈を梃子として、差異との連動において反復が異なるものの回帰として現れることを指摘し、そこに働く力関係を領土化のプロセスとして、とりわけ異質な諸要素の結合と発散からなるアジャンスマンの実現／現実化として考察する。それは相依相属性において、存在者の根底に同質発生的なひとつの存在が措定されることを、複数の存在論的平面の混交による異質発生的な効果のひとつとして捉えるとともに、そこに窺われる所有の構成的次元の多様性を真理の生産として展開しようともくろむ。そのかぎりでは、ドゥルーズ／ガタリの企図は、ハイデガーが途上で停止させてしまった差異の思考を継承し、それをハイデガー以上に徹底させる試みとみなしうるのである。

引用略号

ハイデガーについては、慣例に従い Vittorio Klostermann 社から刊行されている Gesamtausgabe の巻数と頁数を表記した。ドゥルーズ／ガタリについては、以下の通りである。

ouvrages de Gilles Deleuze

DR: *Différence et répétition*, Paris, P.U.F., 1968.

LS: *Logique du sens*, Paris, Éditions de Minuit, 1969.

F: *Foucault*, Paris, Éditions de Minuit, 1986.

P: *Le Pli: Leibniz et le baroque*, Paris, Éditions de Minuit, 1988.

PP: *Pourparlers 1972-1990*, Paris, Éditions de Minuit, 1990.

D: *Dialogues, en collaboration avec Claire Parinet*, Paris, Flammarion, édition augmentée, 1996.

DRF: *Deux régimes de fous, textes et entretiens 1975-1995*, édition préparée par David Lapoujade, Paris, Éditions de Minuit, 2003.

ouvrages de Gilles Deleuze et de Félix Guattari

AO: *Capitalisme et schizophrénie tome 1: L'Anti-Œdipe*, Paris, Éditions de Minuit, édition augmentée, 1973.

MP: *Capitalisme et schizophrénie tome 2: Mille plateaux*, Paris, Éditions de Minuit, 1980.

QPh: *Qu'est-ce que la philosophie ?*, Paris, Éditions de Minuit, 1991.

ouvrages de Félix Guattari

IM: *L'Inconscient machinique, essais de schizo-analyse*, Fontenay-sous-Bois, Éditions recherches, 1979.

LF: *Lignes de fuite: pour un autre monde de possibles*, préface de Liane Mozère, Mayenne, Éditions de l'Aube, 2011.

QE: *Qu'est-ce que l'écosophie ?*, textes présentés et agencés par Stéphane Nadaud, Ligne/Imec, 2013.

Yasuhiko MASUDA

Ressemblance et divergence entre Heidegger et Deleuze/Guattari

— *sur l'appartenance mutuelle*